

# 南部實長考

—實長の姓について—

中里悠光

## 目次

- (1) 日蓮聖人遺文における扱い
- (2) 諸系図における扱い
- (3) 實長遺文における扱い
- (4) その他の資料における扱い

## はじめに

本年（昭和五十六年）は日蓮聖人第七百遠忌の年に当る。この嘉年に相会することは日蓮門下のひとりとして寔に感激ひとしおである。いまここに七百年の昔を顧みる時やはり日蓮聖人の生涯において身延在山九ヶ年の意義は誠に深いものがある。しかしながら日蓮聖人身延御入山の直接関わったところの實長については意外に知られていない。このような中であってかって宮崎英修博士の出された「波木井南部氏事跡考」は唯一の本格的な資料であり、實長に關する限り他にこれ程の書は見当らない。が、まだまだ研究されていない部分が存在し、宗門において伝承的實長像が深い考察もなされぬまま受容されている。

南部實長考（中里）

この所以を以てこの稿を鎬矢として研究を重ねて行く所存である。

(1)、日蓮聖人遺文における扱い

現在日蓮聖人が實長に与えたとされる遺文は次の六篇である。

- 一、六郎恆長御消息（昭定 四四〇頁）
- 一、南部六郎殿御書（〃 四八七頁）
- 一、波木井三郎御返事（〃 七四五頁）
- 一、地引御書（〃 一八山四頁）
- 一、波木井殿御報（〃 一九二四頁）
- 一、波木井殿御書（〃 一九二五頁）

以上六篇について順次考察を加えていきたいと思う。

「六郎恆長御消息」は

九月 日

南部六郎恆長殿

日蓮 花押

とあって「南部」と称している。ただ恆長と實長が果して同一人物であるかどうかということについては「年譜攷異」に

書尾云「南部六郎恆長」、按写「誤實長一耶、或實長一族耶。」

とあるが後述するように諸系図中に恆長なる人物は見当らず、塩田博士も「波木井公一族と身延山」に於て

「隋つて六郎恆長とは他に判然たる証拠のない限り、恆長は實長の誤写であらうことは、本書が「本満寺録外」に蒐集せられた点からもしか思はれるのである。」

と考察されているように古来この点について疑問はなかつたようである。實長に関する書物或は日蓮聖人の遺文中他に恆長なる人物が見られない以上「年譜攷異」の云う恆長は實長の単なる誤写と見るべきであらう。

「南部六郎殿御書」は

五月十六日

南部六郎殿

日蓮 花押

とあつて「南部」と称している。

「波木井三郎御返事」は

文永十年 太政 癸酉 八月三日

甲斐国南部六郎三郎殿御返事

日蓮 花押

とあつてこれも「南部」と称している。ただ甲斐国南部六郎三郎が實長であるかどうかについては聊か疑問がある。つまり「白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事」の中にこの甲斐国南部六郎三郎という名が二十三番目に見える。曰く

一 甲斐国南部六郎三郎者、日興弟子也、仍所申与一如件、

南部實長考（中里）

南部實長考（中里）

とあるのがそれである。ここに云うところの甲斐國南部六郎三郎が實長でないことは二十番目に一甲斐國南部六郎入道者、日興弟子也、仍所<sub>ニ</sub>申<sub>ト</sub>与<sub>ル</sub>如<sub>ク</sub>件<sub>ト</sub>とあるのが實長とされていることから明らかである。この点については疑問を呈するに止める。

「地引御書」は

十一月廿五日

南部六郎殿

とあり「南部」と称している。

日蓮 花押

「波木井殿御報」は

九月十九日

進上波木井殿 御侍

日蓮

所らうのあひだ、はんぎやうをくはへず候事、恐入候。とあり「波木井」と称している。

最後の「波木井殿御書」は、遠くは「宗乗講義録」の「御遺文匡謬録草案」に近くは清水梁山、姉崎正治両氏によって偽作なることが明らかにされているので論を俟たない。よって正確には六篇中五篇が實長に与えられたものと考えられる。

以上のことからわかるように前述五篇の宛名は「南部六郎愼長」、「南部六郎」、「南部六郎三郎」、「南部六郎」、「波木井殿」となっている。つまり五篇中四篇までが「南部」となっていて、最後の一篇だけが「波木井」となっているがこれも「所らうのあひだ、はんぎやうたくはえず候事、恐入候。」とあるように真に花押のある遺文は前四篇であり、聖人遺文の考察による限り日蓮聖人は愼長を南部六郎と称していたと見ることが出来る。

また前四篇中「波木井三郎御返事」では宛名が南部六郎三郎殿御返事となっていて「南部六郎」と「南部六郎三郎」はどのような関係にあるかと云うに「八戸家伝記」<sup>3)</sup>に

實長、彦三郎、当世俗上<sup>1)</sup>略彦一字、而称<sup>2)</sup>呼三郎、故家系載<sup>3)</sup>三郎云、後号<sup>4)</sup>三六郎、  
また「八戸家系」によると愼長の項に

彦三郎、世人上略而呼三郎、故後改称<sup>2)</sup>六郎とあることから明らかのように始め彦三郎と称したが俗に三郎と呼ばれ後になって六郎と改めたと云うのであるから「南部六郎」と「南部六郎三郎」とは同一人物である。

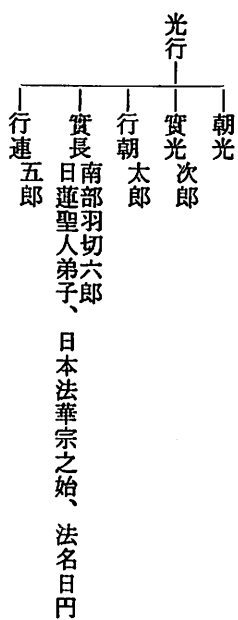
以上日蓮聖人遺文上より実長の姓を考察したわけであるがさきにも述べたように聖人は愼長を「南部六郎」と称していたことは概ね明らかにし得たと考える。

(2)、諸系図における扱い

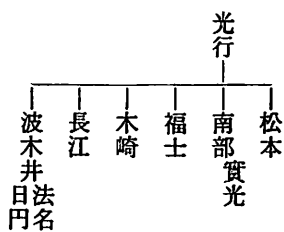
次に愼長の姓を系図の面から考察してみる。

南部實長考（中里）

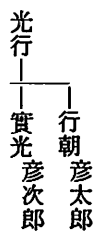
群書類從—秋山系圖



身延類聚追加文



南部根元記、天正南部軍記



朝清 太郎三郎

宗朝 孫四郎

行連 五郎

實長 破切居六郎  
法名日円

身延類聚坤卷

行朝 庶腹分地  
一戸、彦太郎

光行

實光 南部彦次郎

實長 正腹、家督合掌、甲斐波木城主  
南部彦三郎後改六郎

宗朝 四戸、彦四郎

行連 九戸、彦五郎

朝清 七戸、太郎三郎

以上宮崎英修著「波木井南部氏事跡考」より

一行朝君 一戸彦太郎妾腹故、別ニ一戸ヲ領シ玉フ。一戸、  
平館、荒木、津輕石、野田、長牛ノ祖ナリ。

二実光公 彦次郎依ニ嫡腹一嗣子ト為リ玉フ、詳ニ御譜中ニアリ。

南部實長考（中里）

南部實長考（中里）

三實長君 波木井六郎初小四郎八戸ノ祖甲州波木井ヲ  
領シテ以テ家名トシ玉フ。云々

四朝清君

五宗朝君

六行連君

「聞老遺事」（南部叢書<sup>(2)</sup>）より

群書類従—秋山系図では「南部羽切」とし、身延類聚追加分では「波木井」としているがこれは他のものが松本、南部、福士、木崎、長江といづれも土地名であるから波木井も土地名を意味すると考える。南部根元記、天正南部軍記は「破切居」と称し、身延類聚坤巻には「南部」とあり、聞老遺事では「波切井」と書いてある。

以上系図を何種類かみてきたわけであるが概ね系図には土地名が記されているようである。

(3) 實長遺文における扱い

それでは實長自身は自己の姓をどのように考えていたのであろうか。實長の遺文を挙げて考察してみよう。

「身延寄進状」

文永十一年<sup>甲戌</sup>十月二十四日 南部隠士波木井實長入道判

「南部太郎實友一家中」



永仁三年乙未十二月十六日

日円判

「与白蓮阿闍梨御房書」

弘安八年正月四日 沙弥

日円判

進上 白蓮阿闍梨御房

「与白蓮阿闍梨御房書」

二月十九日 沙弥

日円在判

進上 白蓮阿闍梨御房

「与はわきどのへ書」

十二月十一日

源 實長判

進上 はわき殿

「与越前公御房書」

正月二十一日 沙弥

日円在判

進上 越前公御房

南部實長考(中里)

南部實長考（中里）

「与伯耆阿闍梨御房書」

六月五日

日円在判

伯耆阿闍梨御房

以上「日蓮宗宗学全書」上聖部より

以上七通の消息文を見るに實長自身姓の意識は殆んどないようである。ただ武家としては五番目における源・實・長が示すように源氏の血統を自ら任じていたであろうことは首肯できる。ただこれらの消息文を見るかぎり武家としてよりは日蓮聖人の弟子としての意識が強く感ぜられる。

(4)、その他の資料の扱い

最後に前掲以外の資料は實長の姓をどのように扱っているか二、三の資料を当ってみよう。

「宗祖御遷化記録」<sup>(6)</sup>

一文永八年<sup>辛未</sup>九月十二日被<sup>レ</sup>流<sup>ニ</sup>佐<sup>カ</sup>土<sup>カ</sup>島<sup>ニ</sup>預<sup>ニ</sup>武<sup>ウ</sup>州<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>司<sup>ニ</sup>。依<sup>レ</sup>德<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>長<sup>ノ</sup>老<sup>ノ</sup>訴<sup>レ</sup>状<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>別<sup>ノ</sup>紙<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>年<sup>甲戌</sup>二<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>赦<sup>レ</sup>免<sup>ス</sup>。

同五月十六日甲斐国波木井身延山隠居<sup>ス</sup>。  
地頭南郡六郎入道

「白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄<sup>(6)</sup>永仁六年戊戌」

一甲斐国南部六郎入道者、日興弟子也、仍所<sub>ニ</sub>申<sub>与</sub>之<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>件、

「御書略註」<sup>(?)</sup>

正応元年興師等身延離山事

……然ルニ波木井殿ハ初メヨリ黙然トシテ無言也、爰ニ於テ昭師ノ云フ波木井殿不得心ト見ヘ候、当山ハ波木井殿随一ノ大檀那ナレバ波木井殿御不得心ニ於テハ日興ニ定メ難ク候……

……身延離山ト云フハ日向上人ノ許ニテ波木井殿伊勢三嶋ノ社參謗法ノ故ニ……

……波木井殿ノ謗法ニ依テ五老僧身延離山ト云フ事ハ古徳名僧ノ伝記ニ有<sub>レ</sub>之

永仁五年丁酉九月二十五日南部六郎實長卒去ス、法名ハ法寂院日円也、梅平村ノ妙梅山報恩寺、遠嶋、蓮清山妙久寺ノ開山也

在家ノ御弟子

日円法寂院、

甲斐源氏、波木井殿  
見、梅平報恩寺開山

南部實長考(中里)

南部實長考(中里)

建治三年九月十九日吾祖御說法有レ之、提婆品ヲ講シ玉フ、依レ之波木井殿、夫妻并ニ子息親類等…………

…………同月十九日波木井殿へ御返事賜ハル、實長ハ在鎌倉ト見ヘタリ…………

翌十九日南条七郎次郎殿等ノ人人ヲ返サセ玉フニ付テ波木井殿へ御狀ヲ遣ハサル、

身延鑑卷之上<sup>(8)</sup>

…………此の所の地頭は新羅三郎義光四代の末孫南部六郎實長と申し侍り、飯野、御牧、波木井三ヶ郷の領主にて波木井の郷に居住し給うゆえ波木井どのと申し侍り…………

身延鑑卷之中

…………向師を二祖につらねはべる事は、元祖大聖人七年忌正応元年<sup>戊子</sup>九月日興聖人当番の砌り、大旦那波木井實長入道日円申されけるは…………

身延鑑卷之下

南部實長これを感じ得ず。

七面大明神縁起

……諸人疑之之南部六郎亦在座……

身延伽藍記

……文永十一年甲戌五祖遷スシテ応ニ波木井氏請……

(以上「身延鑑」より)

本化別頭仏祖統紀(9)

卷二十四〔列伝〕優婆塞

波木井六郎實長ハ姓者源氏新羅三郎義光五代之裔ニ館ニ甲之波木井ハ和訓相近切邑故以波木井ヲ呼フ之……

卷尾〔扶宗明文志鈔〕

……我寺創妙円日義者南部氏實長世呼波木井六郎之族也……

卷八〔本紀〕高祖

……檀越波木井實長今年六旬初度桂子蘭孫愛姪ハ成ハ作羽切ニ實賀ツ之……

……着ニ身延ハ沢ニ大檀那波木井氏和訓通六郎實長ハ男及親族ヲ而出迎相見大喜相見之地並二字驗之今之寫影實是也實長者新羅源氏三

南部實長考(中里)

南部實長考(中里)

郎義光五代之裔食<sub>三</sub>甲<sub>一</sub>之巨摩郡飯野御牧波木井<sub>三</sub>邑<sub>二</sub>館<sub>一</sub>波木井<sub>二</sub>依以<sub>三</sub>波木井<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>氏……………

通別一覽志(卷末)

五年 丁酉

別四月二十八日像尊者帝都開宗、九月二十五日身延開基檀那波木井實長法諱法寂院日円上人寂壽七十六  
以上何種類か資料を見てきたわけであるが、南部、波木井と使い方が区々でこれ等の資料からいづれをとるかむづかしい。

ただ興師が實長を南部六郎と呼んでいたであろうことは前述の「宗祖御遷化記録」、「白蓮弟子分与申御筆御本尊目録」から明らかである。然るに日順の「御書略註」はほぼ波木井殿と称している。また「身延鑑」では上巻において「波木井の郷に居住し給うゆえ波木井どのと申し侍り」とあるように本来南部六郎實長とあったものを俗称で波木井殿と呼んでいる。最後に「本化別頭仏祖統紀」では波木井に統一しているようである。

むすび

以上實長の姓について日蓮聖人遺文、諸系図、實長の消息文、その他の資料の四点から考察を加えたが、系図から考えると實長の父光行が南部家の祖とされているのであるから南部光行の子であるから必然的に南部實長であってしかるべきである。ただ光行の父遠光は加賀美遠光であるが光行を加賀美光行と称さず、南部を領した為に南部光行と

呼ぶことを考慮に入れると、波木井に居住していた實長を波木井實長とすることも一考である。しかしながらここで最も注意すべきことは實長が八戸家の祖であるという事実である。系図によって明らかのように光行の子息は一戸、盛岡南部、八戸、七戸、四戸、九戸の祖として記されている。つまり八戸家系によると光行―實長―實繼―長繼―師行……………と続き現在三十七代に至るが、いわゆる波木井を称する系統は十代三河守義實の代に武田信虎によって滅ぼされ系図上は絶えてしまっているという史実と考へさせてこの稿の主題である實長の姓については結論を出し得たと確信する。

[註]

- (1) 棲神 二十六号
- (2) 宗学全書 興尊全集奥門集
- (3) 南部家文書 三四三頁
- (4) 〃 二九九頁
- (5) 宗学全書 興尊全集奥門集
- (6) 〃 〃
- (7) 〃 史伝旧記部一
- (8) 身延鑑 (身延山久遠寺発行)
- (9) 本化別頭仏祖統紀 (本満寺発行)